

## 豊田市域の交通事故分析

豊田工業高等専門学校 正員 野田宏治

豊田工業高等専門学校 正員 栗本 譲

豊田工業高等専門学校 正員 荻野 弘

### 1. はじめに

最近の交通事故の特徴は、若年者の暴走事故、高幼年者の巻き込み事故が発生していることであろう。豊田市の交通事故は、昭和47年の1422件をピークに減少し、昭和50年にはピーク時の66%まで低下したが、その後再び増加に転じ昭和58年にはピーク時の87%、1238件にも達した。本研究では、豊田都市計画区域内で昭和56～58年に発生した交通事故の特性を交通事故統計原票の分析によって明らかにし、交通事故防止対策の一助とするものである。

### 2. 豊田市の概要および交通特性

(1)地形上の特徴 南北に流れる矢作川により市域が二分されている。(2)人口 昭和58年には、約30万人で愛知県下第3の都市である。人口密度は、1016.5人/km<sup>2</sup>。(3)自動車保有台数 昭和57年で全国平均0.360台/人に対し0.584である。昭和58年では0.610にも達している。(4)道路網が一点に集中する 市内の国道、主要地方道計9路線はいずれも市中心部から放射状に発達し環状道路となるべき路線がない。したがって中心部を横断しなければ目的地に到着できない。(5)画一的なOD 市の南西部に点在する工場と東・北部に集中している住宅をODのトリップエンドとする交通が朝夕に生じ、特に市街地中心部周辺の混雑が著しい。(6)大量輸送機関が少ない 大量輸送機関はいずれも整備のおくれ、あるいは利用がさめて不便との理由から利用が少ない。出勤目的での鉄道分担率は6.1%、バスは1.8%にすぎない。これに対し自動車は74.2%である。全目的でみても鉄道が5.0%、バスは1.6%である。これに対し自動車は54.3%とかなり高い。

### 3. 交通事故統計原票

交通事故統計原票は、交通事故(人身事故)が発生した時、警察官が事故当事者から聴聞し作成した調書を基に作ったもので、その内容は発生日時場所、被害状況、天候、道路状況、事故類型、当事者に関する項目、事故原因、負傷程度・部位、病院到着までの時間等100余りの項目が含まれる。これらは第1当事者(原因者)、第2当事者(被原因者)について記録されている。なお、当事者の定義は現場警察官の判断によっており、かならずしも正確ではない。

### 4. 交通事故分析

(1)交通事故率 表-1に示す人口1000人当りの交通事故率は、16～29歳(特に19～22歳)で第1、第2当事者とも高い。昭和58年では、50～54歳にも事故のピークがある。1トリップ当りの実交通事故率では50～54歳が高い値であるが、加齢に伴う減少割合は小さく高齢者も原因者となっていることを示している。図-1は昭和56年中京都市圏PT調査から求められる外出者率で外出者の交通事故率を年齢階級ごとに求めたものである。一部を除き高齢になると第1当事者としては減少するが、第2当事者として増加している。特に昭和58年の第2当事者55～59歳以上では著しいものとなっている。

